

昭和三十二年十一月 〆 講演

「今日に生きる倫理」

私達は、みな、今日に生きているわけです。

私共の生きている今日というのは、普通の物理学でいうような、巾のないものでなくして、巾をもっているものであると思うのであります。

即ち、一方からいうと、私達は過去を背負っている。また、一方からいうと、未来を孕んでいる。そういう現実の中に生きているのであります。

そういう現実の中で、君達がどういうように生きていったらいいかということをお話して見ようと思います。

我々は、それぞれの過去を背負い、未来を孕む一つの現実の中に生きている。それを仮に「環境」というなら、環境の中に生きている。そして、その環境というものが、我々に対して、非常な力をもっている。これは諸君の御承知の通りであります。

ことに、現在、我々の物の考え方というのは、どちらかといえば、環境というものに重きを置く考えです。例えば、一つの出来事があると、本人の責任を考えるよりも、先ず、そういうこ

とが起るといふような環境なのだ、そういうようなことが起る世界なんだ、というように、環境というものを非常に重く見るような考え方であります。ところで、そういう環境というのは、すべて自分達が作ったというものではないのであつて、或る意味では、自分達は環境の中に置かれた、といつてもよいわけであります。

例えば、極端に言えば、親から生れようとして生れて来たわけではなく、また、生れたとたんに某（それがし）の子である。或いは、日本国に生れようといつて生れて来たのではないのであつて、生れたとたんに日本国民である。即ち、そういう意味では、ハイデッガーの有名な「人間存在」といふのは、投げ込まれた存在」といふことが云えるわけで、私達は、一つの環境の中に投込まれたといつてもよい存在ではないかろうか。そういう環境というものが非常な力をもっている。いいかえると、我々はみんな、それぞれ運命を背負っているといつてよいわけだと思ひます。或る意味では、運命の重圧のもとに、自分達があえいでいるといつてもよい

のであります。

ところで、その運命といふのは、一体、我々に対してどういふ力を持つているかということが非常に問題だと思ふ。或る人達は、環境といふものを分析すると、その基盤をなすものは経済生活であるといふ。たしかに環境の基盤をなすものは経済生活である。だから、経済生活といふものが人間を作つてゐる。云いかえれば、経済生活が人間を作るのである。例えば、暮しが悪いと云うと、考え方までも貧乏のようなゆとりのない考え方になる。暮しが豊かだといふと、考え方迄も豊かになるといふように、経済生活といふものが人間の生活を左右するといふように考える。

勿論、そのようなことがあるといふことは事実であります。そういう考え方をもちと極端にすると、盗みをした人間があつたとすると、それは貧乏のためである。貧乏といふものは、政治が悪いからだ、社会の不幸だといふような考え方をする人がいる。盗みをしたのは貧乏のためだ。貧乏は政治が悪いのだといふような考え

独協学園長 天野貞祐先生

方は、一体どういうものであるかと考えてみますと、若し、我々の生活というものが、環境というものに支配されているとするならば、我々の生活も自然現象と同じことになる。

自然現象というのは、一定の原因があれば一定の結果が起るといふように、必然性によつて絶対的に支配されている。例えば、石を投げれば必ず落ちる。火を燃せば必ず燃えあがる。その間に偶然を入れる余地は、自然現象には全然ない。

ところが、人間も一定の環境に置かれるとそれに支配されると云うならば、自然現象と同じことである。したがつて、善悪ということはないということにならざるを得ないのであります。

ところで、盗みをしたのは貧乏のためであるといった論をする人に限つて、政治が悪いとか、社会が不公平だとか云うことは、論理が非常に不徹底だといわなければならぬ。その論理からすれば、政治が良いも悪いもない。みな自然の必然性によつて支配されているといわなければならぬ。

ドイツでいま非常に力のある哲学者にハイデッガーと並んでヤスペルス（ヤスパース）という哲学者があるといふことは諸君も知つておられるかと思う。そのヤスペルスが『哲学入門』という本で次のようなことをいつている。

「或る裁判所で、裁判長が被告に有罪の判決を下した。そうしたところ、被告が非常に憤慨して裁判長に喰つてかかった。被告のいふのには、『どうして裁判長は自分を有罪にするのか、自分は何にも悪いのではなく、自分の境遇が悪くてしたのにどうして有罪の判決を下すか』。裁判長が答えていふのには、もしもあなたの論理が正しいとすると、境遇が悪いのであつて、本人が悪くないのであり、責められるべきものは境遇で本人を責めてはいけないといふ論理になる。すると実は私も裁判長といふ境遇のためにこの判決を下したのであるから、あなたの論理からゆくと責められるべきものは裁判長といふ境遇であつて、私ではないのであるから、私を責めるといふことはあなたの論理に矛盾する」と答えたといふ書いている。

ようするに、そういう理論からすれば、責任とか善悪ということはないのである。人間のすることは総て、自然、必然的に規定されているといふことにならざるを得ないのであります。即ち、そういう論理からは、善悪といふものは迷いだ、というようにならなければならぬ。だから政治が悪いとか、社会が不公平ということとはあり得ない。政治家もそれぞれの環境の為にそういった行為をしたのであるから、何も政治家が悪いのではなく、自然現象と同じである人間のすることは、石が投げられて落ちるのと

同じであるといふ論理にならなければならぬ。い。

そういう宿命論とか必然論とかいふものは、確かに頭で考えることが出来る。しかし頭で考えることが出来ても、吾々の体験には合わないのである。例えば、諸君のうちに一人でも、後悔という体験を持たない方はないと思ふのである。ところで後悔といふものはどういふことであるかといふと、あの時はああいふことをしたけれどもしない方がよかつたとか、あの時は右へ行つたけれども左に行けばよかつたとか、いふように、起つたことも起らないことも、どちらも可能だつたといふことを前提として、後悔といふものが意味をもつてくると思ふのである。起るべきことが、自然、必然的に起つたことを後悔するのはナンセンスなことだと思ふ。ところが後悔といふ体験は、吾々が生きていくといふ体験と同じことであつて、それが全然意味をもたないといふことであれば、人生といふものも意味を持たないものと同じになつてくる。善悪といふものがないといふことは、頭で考えてもすべて自然、必然的だといふことは出来るけれども、それでは吾々の体験とは合っていない。吾々の生活といふものは成り立たない。そのように頭で考えることが出来ても、それが吾々の体験に合つてこないことを、俗に観念論といふ。

一体、観念論という言葉は、もとはそういう意味ではなく、認識論上の言葉で、吾々の認識している世界はそのまま実在でなくして、吾々の主観の要素が加わって出来ている世界である、というのが観念論である。けれども、俗には、一応頭で考えることは出来るけれども体験には合わないことを観念論といわれている。

そのように善悪はないのだというようなことは、観念的に云えても現実には云うことが出来ない。ところが一番現実的な、一番具体的な例えば、盗みをしたのは貧乏の為だ、という論をする人が、最も観念的なことを云っていると思うのである。

そういうわけで、人間というものとは全く環境によって作られてしまふとか、或いは運命によって人間が作られるとかというものは、一つの観念論であって、現実の吾々の体験を説明するわけにはいかない。ここで私は次のようなことを思い出すのであります。

今から三年前、西独の総同盟の書記長のアルビンカンという人が日本に来た。この人が日独協会で次のような話しをした。「西独の経済はもう復興し確立して、少しの心配もない。一体何が西独の経済を確立させたか。こういうことに対して世間はみんな、西独の奇蹟というけれども、奇蹟でもなんでもない。それは経営者も労働者も国の経済が確立するまでは、決して経

済の復興を阻害するようなことはしないという建前でやってきた。だから西独の経済を復興させたのは奇蹟ではなくして、経営者と労働者の思慮と自己犠牲だ」と云った。

私はそれを聞きながら次のように思ったのである。西独も日本も敗戦という運命を背負っているというには変りがない。むしろドイツの方が国を両断されているから、ひどい運命を背負ったといつて過言ではない。ところがドイツは自国の経済が確立する迄は、復興を阻害するようなことはやらないと云って、経済を確立した。日本はどうかといえば、戦後は色々な争議が勃発し、特需という利益があつたにかかわらず、今もつて日本経済は確立していないように思うのである。

敗戦という運命にあえばみんなが同じになるかという、決してそうではない。「禍いを転じて、福となす」というものもあれば、「禍いを益々禍いに」してしまうものもある。私はその時に、以上のように感じたのであります。

アリストテレスが『ニコマコス倫理学』という書物の中で「運命というものは、人間では如何とも出来ないものを持っている。けれども運命に対する対し方は、人間の自由にまかされている」といつている。その例として、アリストテレスは「同じ靴を作る革でも、良い靴屋の手にかかれば、良い靴が出来る。悪い靴屋の手

にかかれば、悪い靴が出来る」ということを云っているのである。同じ運命でも、或る人は禍を益々禍とし、他の者は禍を転じて福とすると云うように、運命に如何とも出来ないものがあつても、それに対処する仕方は、人間の自由にかされるといつている。

人間はただ運命のままになるのではなくて、運命を切り拓くとか、或いは自分の環境を立てなおすということは、みんながしていることであると思う。環境通りになつていくわけではないのである。

例えば、こういう立派な環境で諸君のように勉強されれば、みんな勉強がよく出来るというのが事実であると思う。けれども、諸君の中に何人かがほんとうにこういう所を理解して、そしてこういう所を使つて、ほんとうに勉強にはげむということをされれば、自然みんなが勉強にはげむような環境になるというのも事実だと思ふ。

環境が諸君を作るといふのも事実だけれども、諸君がまた環境を作るといふのもまた事実である。したがつて、人間はただ環境に作られるというだけでなく、環境を作るといふ力を持っている。西田哲学の云い方をすれば、人間は環境に作られながら、環境を作り、歴史に作られながら、歴史を作り、運命に作られながら、運命を作るものと云える。私は以上、こうい

うことをいつて来たのであります。環境の力というものは非常に大きい。けれども、人間は環境を作るといふ力をもっている。その力を私は自由というのである。

自由というと、一般世間では、何でも自分のしたいほうだいのことをするのが自由であると考えますが、もしも、人間がしたいほうだいのことをするのが自由とするならば、動物の方がよほど自由だと思ふのである。人間はしたいことも我慢する。それが人間であり、また出来ないのが人間である。

人権宣言第一条には「人間は生れながらにして自由であつて、その尊厳と権利に於いては平等である。人間は理性と良心を与えられていて相互に同胞の精神をもつて行動しなければならぬ」といつている。

人間は生れながらにして自由だといつて、人間の本質を自由だといふふうの規定している。またヘーゲルの有名な言葉では「物の本質は重さであり、人間精神の本質は自由だ」とある。人間の本質が自由だとして、それが動物より劣つてゐるとしたら非常におかしい話である。人間をして人間たらしむる自由といふのは、決してしたいほうだいをするような自由ではないといふべきだと思ふ。自由といふのは、人間が自分で自分の在り方を決める際に、自分の情欲とか我儘を自分で支配する力、そういう力が

自由だといふべきだと思ふのである。

それでは、法律上の自由はどうなのかと云うと、例えば、新憲法では基本人權といふのを非常に強くいつて、それについて吾々は色々な自由とか権利といふものをもちつてゐるのであります。それは無制限でないものであつて、いつでもそこには制限がついてゐる。その制限は一体どういふ制限であるかといへば、「公共の福祉に反しない限り」といふ制限である。例えば、憲法第十三条を見ますと、そこには「総て國民は個人として尊重される。生命の自由及び幸福追求に対する國民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法、その他の国政上で最大の尊重を必要とする」、或いは二十二条には「何人も公共の福祉に反しない限り居住の移転及び職業の選択の自由を有する」といつて、公共の福祉に反しないといふ条件を付けて吾々はいろんな権利とか自由とかをもつてゐるといふことは憲法の規定するところである。人間は、自分勝手にやるのではなくして、自分で自分を制御するといふ力を持つてゐる。それで法律は、これだけのことはやつてよいといふのが法律上の自由である。

ルーズベルトが四つの自由といつたとは有名である。第一は、欠乏からの自由。第二は、恐怖からの自由。第三は、言論の自由。第四は、信教の自由。これが、ルーズベルトの四つの自

由であるといふことであるが、はじめの二つは、吾々は人格であるから共同して実現すべき社会的自由だと思ふのである。次の一つは、法律上の自由である。法律上の自由といふのは前にも述べた通り、許可の意味の自由である。そこで、私は、自由について四つの区別をしようと思ふのであります。

第一は、決断の自由。第二は、実践的自由。第三は、法律上の自由。第四は、社会的自由。以上を分析すると第一と第二は人格的自由、第三と第四は法律上の自由。この二つを混同するところに色々な議論の混雑がおこると思ふのである。

昨年、石川達三氏が「世界は變つた」といふ文章を朝日新聞に書いて、日本は自由の過剰だからして、過剰な自由を制限すべきだといふ主旨のことを云つて物議をかもしたことがある。

石川氏の論は大体、次のような論であつたと思ふ。ソ連や中共は社会が整頓して進歩があるけれども、日本の社会は整頓せず進歩がない。それは、日本に自由が過剰であるからだといふ論である。自由過剰といふから非常に非難を受けたのであるが、しかし、この論はもう少し考へて見る必要がある。尤も石川氏の論に対して総ての批評家が一致してゐたことは「ソ連や中共では、社会が整頓して進歩があるけれども、しかし、それは、如何なる犠牲に於いて得たか

という石川氏の反省がない」。こういうことをみんなが云った。私もそれは同感である。けれども、ソ連や中共は社会が整頓して進歩があるが、日本は無いという事は、一応考えて見る必要がある。私の考えでは、ソ連や中共の人民は非常に教育程度が低い。これは誰でも認めるところである。

私のいう第一、第二の人格的自由というものの程度もまた非常に低いと思う。それでは法律上の自由はどうだろうか。ソ連、中共の人民はほとんど法律上の自由をもっていないといっているくらいである。いいかえれば、人格的自由というものも非常に低いけれども、法律上の自由も非常に範囲が狭い。ようするに両者が釣り合っているということが云えるのである。したがって為政者はどうということでも自由にやる。ここに独裁政治の長所を持っていると云える。私は最近のソ連の科学の発達等もその独裁政治の一面だと思っております。

例えば、アメリカでも戦争中にはほとんど大統領の独裁であつて、それが原子力の発展に寄与したといわれている。だから独裁政治はよいというのでない。独裁政治は非常に危険を蔵している。しかし、ソ連で社会が整頓しているというのは、人民のほとんどが政治的自由をもたないところにあると思う。ようするに人格的自由と政治的自由がバランスしているところに

あると思う。日本はどうかというと、教育が進んでいるから人格的自由というのは非常に高けれども、法律的自由というのはほとんど無際限といつてもよい。日本を苦しめているものは、人格的自由と法律的自由のアンバランスであると思うのであります。

ヘーゲルの有名な言葉に「歴史の進歩は自由の意識の進歩だ」といわれている。ほんとうの人格的自由は、自分で決断し、自分の我儘を自分でおさえてゆく意味での自由であり、それが高ければ高い程、社会は進歩するのである。けれども、それだけではない。そういう自由と法律上の自由というものがバランスしていないところに日本の悩みがあると思う。ただ、石川氏が制限しろという自由は、法律上の自由であつて人格的自由ではないというふうに解すれば、何にもむずかしい問題ではない、極めて簡単な問題だと思えるのである。

自由というものを考えてゆくと、人間は単に境遇によつて作られるのではなく、境遇を自分で作つてゆく力を人間が持っている。それが自由である。したがつて、人間のすることが善いか悪いかということがあるが、人間のすることが総て自然現象であるならば、善いことや悪いことではない。人間がすることに善いとか、悪いことをするということは自由がある。したがつて、善いことや悪いことがあるということは、

いいかえると道徳があるということである。

道徳ということについて、先ず一般に道徳が変るといふことが云われているが、はたして道徳が変るかといへば、変らないところと変るところがある。では変るところはどこかといへば、今迄自覚されないことが新しく自覚されるということである。例えば、戦争前迄は、働くということはいやしいことのように思つていたけれども、戦後は働くということが良いことだ、正しく働き、正しく生きるということが人間の本当の生きかたがあるというようなことは、道徳が變つたといつてもよい。或いは、今迄自覚されていたけれどもそれを特に前面に押し出すということがある。例えば、自由ということではギリシャの昔から知られていることであるけれども、近世になつて自由ということが強くいわれ、特に戦後の日本に於いて強く前面に押し出された。こういうのも道徳が變つたといつていいと思われる。

道徳が變るといふことで一番大切なことは、その本質は變らないけれども、その道徳の在り方が變り、その作用が變り、実現の仕方が變るのである。

そこで道徳とは一体どういふものであるのか。道徳とは、社会を成立させる為に吾々がしたがわなければならぬことであると思ふのである。

法というと、法律だけが法のように考えますが、礼儀も法であるし、会社の規約も法であるし、この寮の規則も法である。もっとさかのぼると、東洋では道とか、西洋でいうなら神の意志というものも法であると思う。道徳も一つの法であると思うのであります。

倫理の「倫」とは「ともがら」ということであり、「理」とは「筋道」ということである。即ち「ともがらの筋道」が道徳である。社会を成り立たせるところの筋道が道徳である。諸君のなさっている寮生活も一つの社会ですが、寮生活をする為には、みんながお互いに信頼し合う、互いに正直である、みんなが勤勉であるとか、約束は守るといふことがなければ寮生活というものが成り立たないと思う。そういうものを成り立たせる筋道が道徳である。そういう道徳が無闇に変わってしまうというわけではないのである。人間存在の理法であつて、また事実変つていない。しかし、その在り方が変つて来ているということである。

ところでもう一歩進んで考えてみると、その在り方というのは時代とか国というだけではなく、一つ一つの場合違つていふこともよい。実在はギリシャの哲学者がいつたように万物流転であつて、たえず内容が變つていふのであるから、親切といへばいつでも人に「イエス」と云つた方が親切と限らない。或る時は「ノー」

と云つた方が親切である。又、勇氣というのは、いつでも強く出るのが勇氣と限らない、或る時は隠忍した方が勇氣がある。このようにその時その時によつて吾々のすることというのは、違つていなければならぬ。

以上のように考えて来ますと、それでは何が人間の標準といふのかと云うと、昔から「中」といふことが云われて、ギリシャでも中庸と云い、東洋でも中庸といつていふのである。例えば、ケチと云うのもいけぬ。また、放漫といふのもいけぬ。ケチと放漫の中に位する寛容といふことがいわれていふ。或いは臆病はいけぬ。しかし、粗暴もいけぬ。その中に當る勇氣があるのである。「中」といふことがよいのだと東西共にいわれていふ。この場合、何が中だといふことを決めることがむずかしい。そこで若い諸君に次のことを考えていただきたい。

人間は始めから善意をもたなければ問題にならない。善意といふものは人間に欠くべからざる条件である。善意さえあれば、それでよいかと云うと、善意だけでは足りない。もし私達が善意をもつて考えさえすれば必ずその考えが適當するとすれば、人生は実に楽だと思ふのである。ところが自分がどんなに善意をもつて考えても、自分のすることが的中するとは限らない。油断をすればいつでも間違ふ危険にさら

されている。これが人生である。人間は考える存在者で、考えるといふことが人間の偉大さであるけれども、考えたことが的中するとは限らない。吾々はいつても自分が良いと思つても、良くない場合があり得るといふ謙遜な氣持をもつていふべきだと思ふ。

ことに今日は非常に知識が専門化して、判断がむずかしくなつて来ている。人の運命に関したり、或いは、国の大事であつたりするような事であつたりすることについては、判断が非常に慎重でなければならぬ。自分のよくわからぬことを判断することくらい、非学問的なこととはない。

道徳が、法律と違つて非常に大切にしていふことは、どういふ動機からやるかといふことである。法律であると情状酌量といふ時には動機といふことが関係するが、一般には、法に合つていさえすればよいのである。道徳はどういふ動機からやるかといふことが非常に重要な為めに、動機さえよければそれでよいといふ考えが起りやすい。自分はよいつもりでやつても間違ふといふことがある。

今日、ことに学校では社会科といふことをいふて、そして子供の注意をみな社会に向けてしまつていふ。子供が社会の欠点をいろいろ批判すると、批判的精神といつて喜んでいふ先生もいふ。ところが批判といふのは、いつでも自分

がよく理解する事ではなくては批判は出来ない。経済学を知らない者が経済学を批判することは出来ない。

批判ということについて、カントは「書物を批判するとか、システムを批判するということではなくして、自分の認識能力を批判する。即ち、おのれ自身を知れと云うことが批判ということの一番根本だ」と云っている。ところが、今の世間では、自分が一体それを批判する力をもっているかという反省は、一つもない。教育のことを何にも知らない人が、教育の批判をしている。そういった事は批判的精神に非常に反している。批判的精神とか学問的精神というのは、先ずそのことがらを理解し、その上で、理解したことを判断する。断定ということに出来るだけ慎重だということを、批判的精神というのである。そこで私共に重要なことは、知識を磨くということである。道徳というと、善意志というところをもつばら人は重んずるが、善意志も勿論大切であるけれども、知識を磨くということが非常に大切である。

とがまた、道徳生活にとつて非常に大切だということを考えなければならぬ。

昨今、道徳教育ということがやかましくいわれているが、一方に於いて私達は善意志を中心にして、所謂、徳を身に付けることが大切であるが、同時に智を身に付けることも非常に大切であると考へざるを得ない。

道徳教育には二つの面がある。一つは、善意志を中心として、自分というものを反省して自分の心を正しくする面である。昔の修身というのはそういう考へ方である。同時にまた、一方では知識を磨いて思慮を養うという二つの面をもっているということ考へなければならぬと思う。我々は自分が主観的に善しと判断すれば、いつでも善いというのではなくして、主観的に善しとする判断が客観性をもつようになる。それが教養ということである。人間を一番向上させ教養することは、吾々の精神の集中努力だということであると思う。それで知識を、体験というものにもたらすことが出来る。人間を一番堕落させることは、イージー・ゴeringということであると思う。今の日本を苦しめている一つの事は、よく知らないことを勝手に判断しているということにあると思うわけである。

以上、私は個人という立場に立つて如何に生

くべきかという問題を考へてきたが、吾々は、ただ個人ではなくして国民なのであるから、国民として今日に生きる倫理はどういうことかということ考へてみようと思うのであります。それは即ち、個人と国家という問題になつてくるのであるが、個人と国家ということについて、戦前から戦争中にかけては、個人というものには国家にデペンドした存在で、それ自身独立の存在でない故に、個人というのはただ国の方便になればそれでよいという全体主義というものが支配的であつた。しかし、個人を粗末にして国が栄えることができないということは敗戦が証明している。

ところが、戦後になると、今度は逆で個人さへ幸福ならば国などはどうでもよいという考へが強くなつて来ているが、個人を粗末にする考へが間違つているように、国家を粗末にする考へも間違つている。

国が独立自由をなくして、一方、個人は幸福であるということはあり得ない。これは残念なことであるけれども、民族や国家の違いと云うことは実に大きな意味を持つていて、自分の国が他国に征服されて支配されるというようなことがあれば、それは、国民の幸福はどういあり得ないと思う。国は国民を大切にし、国民は国を愛するというのが、国家と個人の倫理でなければならないと思うのである。そこで愛国

などと云うと非常に古めかしいことのように思うけれどもそうではない。一体、愛国とはどういうことかというのと、よく世間では国が自分に良くしてくれれば、この国を愛する値打があるから愛国だという。こういう愛国論を分析すると、愛国というのは、ようするに利害関係である。はたして愛国というのは、そういうことであるだろうか。私は愛国とは決して利害の関係ではないと思う。奄美大島の人が日本に復帰したと云って非常に喜んだが、これは暮しがよくなる云々という断じてない。吾々が祖先このかた、およそ二千年、この太平洋の同じ島に住んで同じ日本語を話して、同じ皇室を戴いてそして同じ運命をしのいできた運命協同体が、日本国である。そして、運命協同体の精神的な空気を吸って、私共は生れてきた、この日本国という運命協同体は吾々にとつては存在の母体だ云々というのである。血液の一滴にも祖先の血を感じるといふのが、この日本国である。したがって、それに対して、自分達が愛情をもつのは当然の話であると思う。父母に對するような自然な愛情を国に對してもっているのである。値打があるから愛するといふけれども、値打がなければ愛さないというのは他人の国のことだろうと思う。或いは文化財のことだと思ふのである。

学問とか芸術というものは、値打がなければ

愛さないものである。が、自分の国なのである、自分達はその一員なのである。したがって対象的なものでなくして、主体的なものである。だから国が値打がないなら、値打のあるようにするというのが愛国と思ふ。

それでは、国を良くするにはどうしたらよいか、それには自分を良くするにある。自分を良くするにはどうしたらよいか、自分の在り方に忠実だということだと、私は思っている。学生は学生の在り方で、和敬塾の塾生は、塾生の在り方に忠実であるということだと思ふ。その在り方に忠実ということが自分を良くする。それが家を良くし国を良くし、世界を良くするのだと思ふ。したがって、愛国という自分の生活と何か遠いことのように考えるが、非常に間違っている。

吾々が日常生活に忠実であるということが愛国だと思ふのである。愛国ということに続いて、考えていただきたいのは天皇ということである。

天皇とは一体どう考えたらよいか。私は、憲法第一条通りに考えている。第一条に「天皇は日本国の象徴で日本国民統合の象徴だ」とある。象徴とはギリシヤ以来の哲学の概念で、例えば、マイクロフォンは現代科学の進歩を象徴している。現代科学の進歩ということとは頭で考えることで、理念的なことである。

また、マイクロフォンというものは眼で見たり手をつかむことが出来る。これが象徴なのである。象徴といふとなにか頭で考えたことのように思ふから、分らないのである。象徴といふのは手をつかめるものである。眼で見えるものである。

言語を考えてみると、思想というものは頭で考えるものであり、言語は話せば聞えるし、文字に書けば見えるもの、すなわち、感覺的なものである。言語は思想の象徴である。吾々は思想を日本語という言語で象徴している。そのように考えて、これを定義的に云えば「理念的なものを感覺的なものが現している時に、その感覺的なものを象徴といふ」。

ところで、「天皇」といふものを考えてみると「天皇」は日本国の象徴といふのであるが、みなさん、日本国とは何であるか。日本国とは、国土が日本国というならば、それでは足りないのである。国土といふのは非常に重要な要素であるが、歴史も伝統もない、むき出しの国土が日本国ということはない。そうでなく、先程述べたように、吾々が同じ国土に住んでいて、そして色々の種族から一つの民族を形成し、同じ日本語を話し、同じ皇室を戴き、同じ運命をしいて来た運命協同体のものである。その全体的なものを、「天皇」といふ眼で見えるし、写真に撮れる人が現しているから、「天皇」が日

本国の象徴であり、日本国民統合の象徴だとい
うのであるが、統合というのは、諸君、どこに
もないのである。

統合とは、理念的なものである。その統合を
「天皇」という目で見える人が現しているから、
日本国民統合の象徴なのである。したがって、
「天皇」を尊ぶということは、日本国を尊ぶと
いうことである。

「天皇」は象徴ですから、政治権力はもってお
られないけれども、皆様に考えて戴きたいので
す。この戦争をやめたというのは「天皇」の力
である。「天皇」以外にこの戦争をやめるとい
うことは出来なかった。これは誰でも認めると
ころである。その力を「天皇」はもっている。
或いはまた、マックアーサーに対し日本国民の
ためなら自分はどうなってもよい、あなたの思
う通りにやりなさいと云って、マックアーサー
を人格的に圧倒したという、道徳的な力をもつ
ておられる。それを権威というなら、天皇は権
力は持っていないが、権威は持っているという
ことが云えると思う。そのように「天皇」を考
えていけばよいのではないか。

みなさん、イギリスの大宰相チャーチルが、
かよわい女王に対して、どんなに丁寧な態度を
とっているか、そしてイギリスの国民がどんな
にそれをよしとしているか、私の聞いた話しで
あるけれども、戦後のイギリスは生活がとても

ひどかった。その時に国民は、自分達はしかた
がないが、女王だけは総て平常と同じにしても
らいたいと熱望したと云う。そういう気持がイ
ギリスを依然として世界で有力な国にしてい
ると思う。

日本は天皇が象徴で、そして総理大臣が国会
の指名に依って選ばれ、全責任を負って政治を
するという形が一番良いと思うのであります。

さて、一体、何のために民族とか国家とかい
うものがあるのか。民族とか国家というものは、
優れた文化を作るためにあると思うのである。
ギリシャの国がどうなったところで、ギリシャ
文化は人類の宝である。

二十世紀の時代は、一体何をなすべきか、何
を人類に残すべきか。それは、優れた文化をの
こすことである。しかし、優れた文化というの
は、世界を一つにして、国語を一つにした文化
でなく、それぞれの国が、めいめいの国語をも
って文化を発達させる、即ち、個性を發揮する
ということが世界文化を豊かにすることであ
る。

最近日本にこられた、ガブリエル・マルセル
氏が「単一の国語では詩が書けない。単一の文
化というものは内容が貧弱だ」といわれた。私
と同じような考えを持っておられるので非常
に心強く思っている。そこで二十世紀は、各国
が、それぞれの文化を作り、それを総合して大

きな文化を作ることが、人類の残すべき最大の
ものであると思う。ただし、警察とか運輸とか
については、世界は一つになった方がよいので
ある。

個性というのは、いつでも普遍性をもってい
るものと云える。個性と普遍性とが矛盾する
といったような考え方ほど、間違った考えはな
い。ほんとうの意味の日本的ということは、同
時に、世界的ということである。

例えば、日本の雪舟の絵というものは、中国
の絵とさえ違う個性をもっている。それではそ
の絵が日本しか通用しないかと云えば、世界中
が雪舟の絵をアプリシエートしている。そうい
うように個性的というのが世界性をもってい
ることなのである。

それでは、何が日本の個性であるかという
日本の国柄をして成り立たせる一つのもものは、
皇室である。「天皇」というのは、日本の国柄
である。或いは日本の言葉である。吾々は思想
を象徴するのに日本語で象徴するように、国を
象徴するのに「天皇」で象徴している。そうい
う個性的な日本が、世界性を持っているのであ
る。

日本で最も世界性を持った人物はどういう
人物であるか。例えば内村鑑三は非常な愛国者
である。内村先生が熱血を注いだ「聖書の研究」
という雑誌のモットーはキリストの為、国の為

ということである。世界的であるということは、国の為、日本的であるということである。福沢諭吉でも、西田幾多郎でも、夏目漱石でも、長岡半太郎でも、世界性を持った思想家は非常に日本的人物である。

そこで最後ですが、今の日本というものに対してみなさんのなかには、こんな四等国とか五等国では駄目だというような考え方の人はないかも知れませんが、世間には大分あると思うのであります。しかし、一体、五等国とか六等国というけれども国の値打は何が値打であるか。国の値打というのは、領土の広さではないと思う。領土の広さは望ましいけれども、国の値打は、私は徳性だと思うのである。第二には文化を作る力、文化の創造力だと思うのである。ところが日本人は、道徳性ということにおいて世界のどこにも劣ることはない。ことに道徳性というものは、これを鍛錬すれば高まるし、放置すれば墮落するという性質のものであるから、みんなが自分を良くするという道徳的な努力をすれば、日本人が他の外国人に劣るということはない。文化の創造力はどうか。最近ペンクラブでもってドイツから来た人達といろいろ話しあいをしたが、それらの人々は、実に口をそろえて日本を褒めている。京都とか奈良にある建築物や彫刻、絵画に対し、非常な礼讃の仕方である。

また、考えて見れば、日本人は仏教を取り入れれば、日本仏教というあの雄大な世界観を作っています。道元とか親鸞とか日蓮とか法然とかという人は、世界第一流の宗教家である。

儒教を支那から取り入れれば、日本的にこれを消化して、日本人のバックボーンとしたというように、或いは最近の自然科学の発達でも、日本人のやっていることは素晴らしいものがあると思っております。

万葉の詩人であろうと、雪舟であろうと、みんな吾々と同じ日本人である。だからして私になにも戦争に負けたからといって、勇気をなくすことはよくない。勿論、高慢というのはよくないが、日本民族というのはこれだけ優秀な文化創造の力を持っているのに、まるで持たないかのように思ってしまうのはよくない。持っているものは持っている。持たないものは持たない。それがプライドだと思ふのである。どうか若い諸君にそういう民族としてのプライドをもって生きていただきたい。

それから、今の時代は道徳的に頹廢したといつて非常に悪いように人があるけれども、しかし、今の時代は明治時代よりずっと良いと思う。私は明治十七年に生れて明治時代は好きですけれども、しかし今の方がどれほど進んでいるか。第一に勤労を尊ぶようになった。正しく働いて、正しく生きるといふことがほんとう

の人間の在り方と考えるようになった。第二に、女性の解放である。第三に、人権の尊重である。こういうことは明治時代とは比較にならない。個人の尊重を最も強く唱えた哲学者はカントである。

カントは「人間と物とは違ふ。物には価格があるけれども、人間には価格というものはない。人間は人格としての品位を持っている。だからして、人物を物と同じに扱ってはいけない」。そういうように、すべて人格として扱わねばならない。「人間をただの手段としてはいけない」とカントは云ったのであります。

同じくカントは「人間には尊敬という感情がある。これは対象が人間に限られている。どんなに景色が美しいと思つても、景色を尊敬するということがない。動物をどんなに可愛がつても動物を尊敬するということはない。尊敬というものは人間に限っている。ところが人間でも総ての人間を尊敬するというのはない。ここに非常に辣腕な政治家がいたとする。それを人は恐れたり、或いは驚嘆したりしても、尊敬するということはない。尊敬ということとは、いつも道徳性と連なっている」と云っている。したがつて、書記をしていても、門番をしていても、道徳的な人に対しては尊敬すると、カントは云つた。

私は今日、詳しくこの点を論じなかつたが、

道徳とか倫理とかと云うものはもともと形而上的な根拠をたずねると、東洋では道といい、西洋で云うなれば神の意志とか絶対の価値とか絶対世界というものであって、人間が自覚したものが道徳であり、倫理だと思うのである。そしてその倫理を身に付けているものが徳だと思ふ。そういう意味で私は、道と道徳と徳とこういう区別をするのである。人間が徳を身に付けているということは道を実現していることですから、当然そこに尊敬という感情がおこるのはあたり前のことだと思ふのであります。ところで、道理とか、道ということとはけつして、ひとりで行われるというものではない。人間が行われるようにするのである。論語にも「人よく道を広む」といつているが、道を広めるのが人間なので、人生の意義は吾々がそれぞれの立場において道を広めるにあると思ふのである。才能、地位がどうあろうと、吾々の在り方に忠実ということが道を広めることだと思ふ。自分が生きていたために、社会のためになった、それでいいのである。そこに人生があるというのが私の考えで、そういう立場で今日に生きてゆく。このことはむつかしいが、日本の社会にそれぞれの立場に忠実に生きて行くというものが、私の今日に生きる倫理であります。

(文責在記者)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。